

NHK大阪放送局長賞

ろう者たちのオリンピック

大阪市立聴覚特別支援学校 三年 奥山 おくやま 紗代 さよ

二〇一三年九月七日、日本中が喜びの熱気に包まれた。五十八年ぶりに東京が二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック開催地に決まったのだ。世界スポーツ大会の最高峰であるオリンピック・パラリンピックが日本の首都で開催されるというのはとても誇らしいことであり、何より純粹に嬉しかった。黒い文字で「TOKYO」と書かれた白いカードが現れた瞬間を私は忘れられない。あまりにも嬉しくて、耳の聞こえる友人とまだ見ぬ二〇二〇年を思い浮かべながらオリンピックについて喜々として語り合った。

すると、ふと思った私は耳の聞こえる友人にこう質問を投げかけた。

「デフリンピックは知ってる？」

彼女の返事は首を横に振るものだった。私は少し

ショックを受けた。デフリンピックの内容を知っている人は少ないと分かっていたが、少なくとも名前ぐらいは知っていると思っていたからだ。

デフリンピック、つまり簡単に言えば耳の聞こえない『ろう者』たちのオリンピックである。これは「ろう者 (Deaf) + オリンピック (Olympics)」の造語だという。デフリンピックは競技種類が夏季と冬季を合わせて二十五種類とオリンピックよりも少なく、オリンピックやパラリンピックには無いスポーツもある。しかし、スポーツで人々を笑顔にさせられるという点はどの大会でも同じであると私は思う。

私はデフリンピックの存在は知っていたが見たこともないので、とても遠い存在のように思っていた。だが、二〇一四年に私の通っているろう学校に教育実習生としてある先生がやって来た。その先生はデフリンピックの男子バレーボール日本代表選手だった。そこで話を聞いているうちにデフリンピックの事が身近に思えるようになった。そしてある疑問が浮かんだ。それは、「どうしてデフリンピックは普及しないのか？」ということだ。

その大きな理由に挙げられるものの一つはメディアなどで取り上げられなかったり、放送されないということがある。確かにテレビで放送されるのはオリンピックやパラリンピックなどの大きな大会のみでは、何故デフリンピックは大きな大会で国際的な大会なのにテレビに映らないのだろうか。

それはやはり、日本人がデフリンピックについてあまり関心がないからではないだろうか。手話自由に使えなかった前と比べて、聴覚障がい者への理解は深まり、手話も人前で堂々と使えるようになった。しかし、手話を使っている時に感じる視線で「まだまだだ」と私は思っている。どうすれば、今よりも聴覚障がい者への理解が更に広まり、少しでもデフリンピックに関心を持ってくれるだろうか。

私はデフリンピックを知って以来、ある夢を持った。それはデフリンピックに携わる仕事をする事だ。私は人々を笑顔にさせられて、何かの力を与えることができるスポーツが大好きなので、日本でデフリンピックの知名度を上げたいと、強く思っている。そうすれば、聴覚障がい者たちの活躍の場もさ

らに広がるのではないだろうか。ろう者も活躍できるデフリンピックを見た少年少女たちがもっとスポーツに興味を持ってくれるのではないか。そして、自分が耳が聞こえないことに関して苦しみや悲しみを持つ人が減り、誇りに思えるようになるのではないか。

今はまだ普及もしておらず、ここで述べたことも私の希望に過ぎない。しかし、想像してみしてほしい。もしも、いつかデフリンピックが一般の世界に普及し、当たり前のようにテレビに映っていたとしたら。デフリンピックを映したテレビを耳の聞こえる人たちが囲んで、そして笑顔で応援する姿を。

今、一般の人と障がい者の間には透明で見えない壁がある。お互いがお互いを心のどこかで恐れているからだと私は思う。しかし、お互いのオリンピックが普及すれば、見えない壁も消えて、お互いがお互いを理解する。そして、お互いが真つ当に自分の意見を出し合えるようになればどんなに良いことだろうか。

これから、そんな世界を作るためにも、自分の夢も叶えるために、「デフリンピック」という、「ろう

者たちのオリンピック」を耳の聞こえる友人や知り
合い、それだけではなく、デフリンピックのことを
知らないろう者たちにも少しずつでも広めていく。

それが私の夢であり、日本の声無き障がい者を救
う一手になればと思っている。